



理事 柳原輝明

写真提供 金本 隆

2010年3月6日、7日の二日間大阪府交野市のイワクラツアーを
挙行了。総勢22名の参加で北は
千葉県から南は宮崎県の会員の参加
があった。当日は朝から小雨が降り
続いてしたが、集合時間の1時ごろ
には雨が上がりかろうじて傘を差さ
ずに歩くことができた。

1. 天田神社

午後1時、河内磐船駅を出発。南
東の方向約500mのところにある
天田神社に到着。この神社の祭神は
上筒之命、中筒之命、底筒之命、神
功皇后で、創建年代は不詳である。
ご神体は南東部山中の巨壁であると
いわれている。古代、この付近は交
野物部氏の所領で、地味が肥え、実
り豊かであることから甘田と呼ばれ、
その田の神が甘田神社であり、それ
が転じて天田神社と呼ばれるよう
になった。この神社の位置は、今回探

訪目的である北斗七星の5番目の星
(ひしゃくの柄の部分)にあたるの
ではないかと考えている。

2. 獅子窟寺

1時30分天田神社出発、獅子窟
寺に向かう。緩やかな坂道を歩くこ
と30分弱、獅子窟寺に到着。境内
の右手に天福岩、左手に巨大イワク
ラがそびえている。天福岩には、こ
の岩を抱き、願いを三度唱えれば願
いが叶うと書いてある。みんな思い
思いに岩を抱え何かを願っているよ
うである。本堂左手の階段を上ると
と当寺のご神体といふべき巨大なイ
ワクラがそびえている。圧倒的な迫
力である。そのイワクラの横手に弘
法大師が修行したと言われる獅子窟が
ある。横から見れば巨大な獅子が口
をあけているかのように見えること
から名づけられたそうである。この
獅子窟は山添村の岩屋にそっくりで
あることにびっくりした。巨大な天
井岩を支えるように両脇と真ん中に

支柱のような岩がある。山添村の岩屋は真西を向き冬至の太陽の光が岩屋の奥の壁を明るく照らし、冬至の時期を計る装置であろうという見解が示されている。当獅子窟もほぼ真西を向き真ん中の支柱の平らな節理面は西からほぼ30度北に傾いており、まさしく冬至の太陽の沈む方向に向けられている。おそらくこの獅子窟は古代の冬至の太陽を祀る装置であったと考えられる。

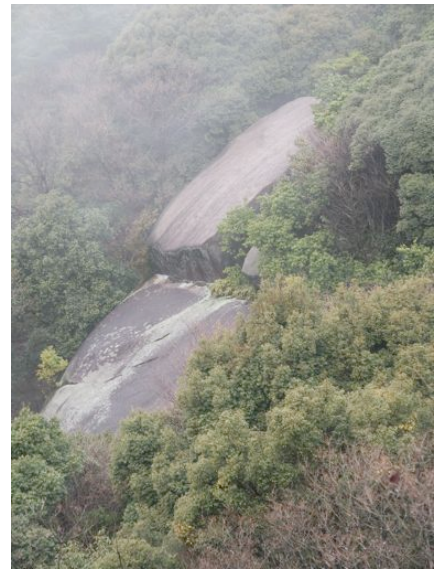


獅子窟

午後2時20分獅子窟寺を後に坂道を下ること約2km、若宮神社に到着する。祭神は住吉四神であるが古伝ではニギハヤヒの命を起源とする。この神社の位置は、北斗七星の第6番目の星に当たる。境内にイワクラらしきものが二つあり、ひとつは本殿近く玉垣で囲まれて祀られているが、いまひとつは少しはなれた松の根元で松の根に巻き込ま

3. 若宮神社

さらに南に500m山道を行くと八丈岩に達する。一帯嫋々たる岩場である。



八丈岩 (写真武部氏提供)

れた形で残っている。宮崎の谷口さんの意見では、北斗七星の第6番目の星は二重星であり、岩が二つ存在することで、この神社が北斗七星の6番目の星を映した場所といえるのではないかと言っています。



若宮神社ご神体岩

4. 星田妙見宮

午後3時30分、若宮神社を後に私市の集落を抜けて星田妙見宮へと向かう。歩くこと約30分で妙見宮の入り口に到着。そこから急な階段を上ること約10分、ようやく妙見宮の拝殿に到着。拝殿裏に高さ2mを超える堂々たる岩が2面そびえている。影向石である。

拝殿で当妙見宮の宮司さんより妙見宮の謂れなどを詳しくうかがうことができた。

妙見宮の謂れでは弘法大師が獅子窟寺で仏眼仏母尊の修法をされたとき当霊山に七曜の星が降臨し、大師自らも「三光清岩正身の妙見」と証せられ北辰妙見大菩薩独秀の霊岳、神仏の宣宅諸天善神影向來会の名山、星の霊場として祀れたという。祭神は、神道では天御中主大神。仏教にては北辰妙見菩薩、陰陽道にては太上神仙鎮宅靈符神。

(星田妙見宮案内板より)



妙見宮影向石

施設で青少年の健康増進のためのスポーツ施設に付随した宿泊施設である。

6時より、会議室でミーティングである。交野ヶ原の北斗七星についてスライドを利用しての話と宮崎のテレビ局作成の宮崎の北斗七星についてのビデオを上映。そのあと、星とイワクラについて意見交換を行った。

その後、恒例の懇親会である。食事とお酒が入り楽しい時間が過ぎていった。

二日目

8時30分生駒交通のマイクロバスが迎えに来ていた。早速全員乗り込み二日目のイワクラツアーの出発である。天候はあいにくの小雨である。

5. 住吉神社

古い町並みが残っている寺の集落まで約10分まで到着。そこから5分で本日最初の目的地である住吉神社に着いた。それは集落の奥深く山の懐に抱かれたようにひっそりと佇んでいた。祭神は住吉四神であるが元はニギハヤヒの命と伝えられている。神社におまいりした後南側に隣接した尾根の頂上にあるイワクラに行く。



住吉神社横のイワクラ

長さ2 m高さ1 m程度の小規模な岩が地上から頭を出している。しかし岩本体は相当深く根を張っているように見受けられた。このイワクラは、交野ヶ原の北斗七星の柄杓の根元の星に当たっている。

このイワクラの横を「かいがけ(峽崖道)」が通り、大和と河内を結ぶ重要な交通路として古代大仏建立の物資や職人が往来し、また、熊野詣の道として賑わったと言われている。

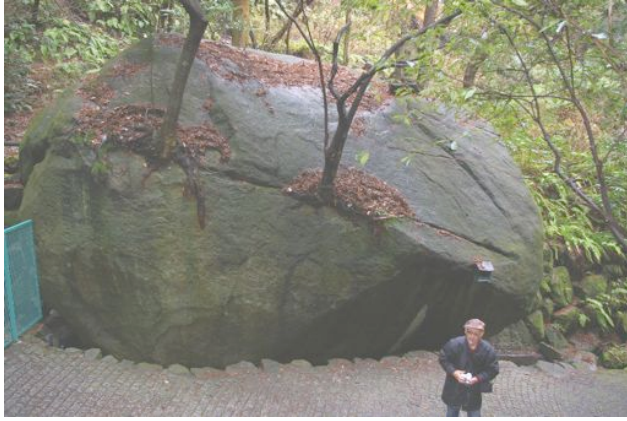
6. 源氏の滝

次に目指したのが北斗七星の柄杓の杓部分の先端に当たる星に対応するイワクラである。神宮寺集落の端にバスを止め、徒歩で交野八景の一つである源氏の滝にむかう。途上、夜泣き石という二つの小ぶりの岩の並んだイワクラに出会う。

伝説に謂う、昔源氏姫と梅千代という若者が山賊にさらわれ、山賊の頭を殺したとき、その頭が二人の母親であることを知り、そのことを悔

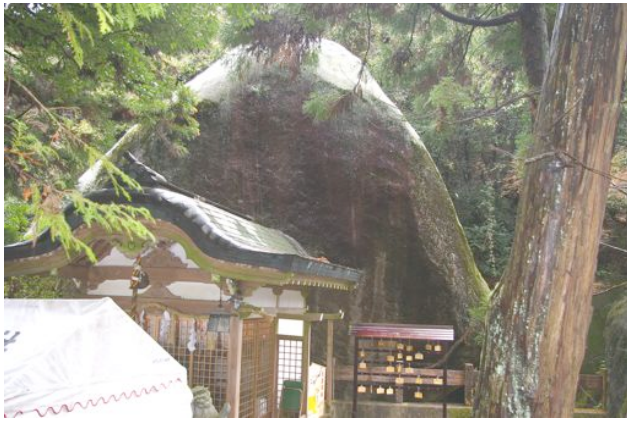
当妙見宮と光林寺と星の森之宮の三点のイワクラを結ぶと約900mの正三角形を示し、「八丁三所」と呼び、交野の名所となっている。

午後5時、妙見宮を後にし、本日の宿交野グリーンビレッジに向かう。交野グリーンビレッジは交野市の



源氏の滝横のイワクラ

やんで源氏姫がこの滝壺に身を投げ、その後この岩が夜泣きすると伝えられている。
少し行くと、巨大な岩に行き着く。高さ4 m幅6 mの巨岩で、あたかも運ばれてきて置かれてあるという雰囲気である。名もなし謂れもないが上部に小さな祠が祀られている。この岩が北斗七星の杓の先端の星ではないかと考えている。

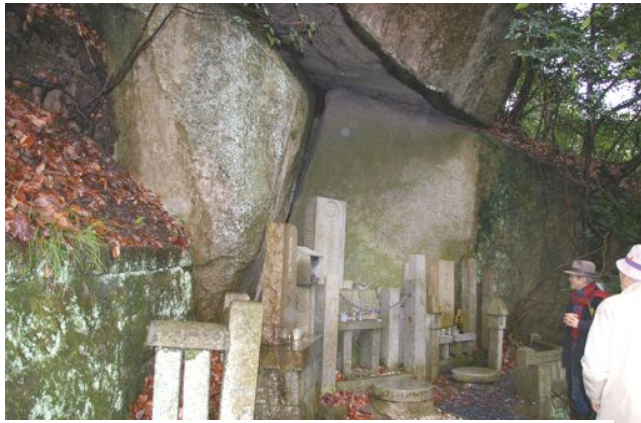


磐船神社ご神体

源氏の滝は高さ18 mの清浄な雰囲気のある滝である。最近金網で囲まれてしまい滝壺には近づけなくなっていたのが残念である。傍らに八大竜王が祀られている。

7・磐船神社

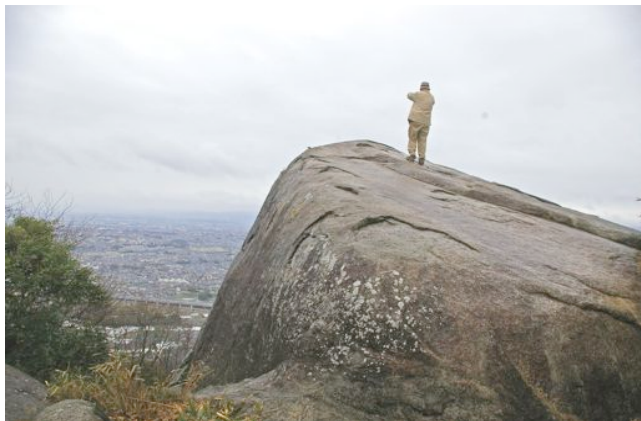
バスに乗ること約20分で交野の有名な磐船神社に到着。当神社はニギハヤヒの命が天照大神の詔により



磐船神社天の岩戸

降臨された地に鎮座している。ご神体は命の乗つてこられた「天の磐船」と言われる高さ12 m、幅12 mもある船の形をした巨岩である。

磐船神社で有名なのはご神体の下部をめぐる胎内くぐりであるが、当日雨のため胎内くぐりは禁止となっていたため、ご神体の後ろ側のイワクラ群のみ参拝することにした。ご



交野山観音岩

神体裏側の巨岩が累々と折り重なっている様は圧巻である。右手の山裾に「天の岩戸」と名づけられたイワクラがあり、その巨大さと造詣の妙に感激した。

8・交野山観音岩

バスで一旦奈良の生駒市に入り北上すること20分で交野市の野外活動センター駐車場に到着。ここか

ら徒歩約10分で交野山の頂上に行く。道は緩やかな山道で、頂上近くで若干急な場所が現れるが、容易に登ることができた。

頂上にある観音岩は聞きしに勝る雄大さである。これほどの巨岩はそうざらには存在しないのではと思えるほどである。

この観音岩は、北斗七星の2番目の星の位置に相当すると考えている。

9. 竜王岩

交野山を一旦下り野外活動センター駐車場に戻る。雨のため、バスの中で弁当を開ける。予定では、この弁当は観音岩で下界を眺めながら食べる予定であったが、雨のため叶わず残念であった。

昼食後小雨の中竜王山に向けて出発。竜王山は交野市の野外活動センター内にあるため車の通る道が整備されていて歩きやすい。最初しばらくは上り坂であるがあとは緩やかな



竜王岩

道である。歩くこと約20分で竜王山の登り口に到着。そこから山道で高低差30mほど登ることになる。一部かなり急な場所があり、会員の武部さんにロープを寄付していただき急な場所に結びつけた。おかげで雨の滑りやすい急坂を無事登ることができ感謝である。

竜王山の頂上は幅7〜8m長さ15mほど平坦になっておりそこに巨大なイワクラが祀られている。幅7



竜王山山頂下の巨岩

〜8m高さ2mほどの巨岩とその後方にご神体と思える高さ3mほどの立石が存在している。

山頂より南の方向に20mほど下ると一際大きい立石がそびえている。そしてその後方にはさらに巨大な岩があり、一体となってひとつの祀り場を構成しているように見える。おそらくこのイワクラは山頂のイワクラを遥拝する場ではなかったかと想像される。このイワクラには名前が

ないが、これほど見事なイワクラに名がないのは不思議である。

■ 終わりに

交野ヶ原に北斗七星を訪ねてと言うことでイワクラツアー in 交野を企画したところ多数の参加を得て盛会のうちに終えることができた。残念ながら天候には恵まれませんでした。・。

今回、北斗七星の星を映したイワクラや神社だけでなく、全国的に有名な磐船神社のご神体磐や獅子窟寺のイワクラなどもツアーに組み入れて見学することができました。これらのイワクラもひよっとしたら何かの星を映しているのではないかと言う気持ちが湧いてきています。今後、北斗七星の更なる探求とおそらくそれに対応しているであろう北極星の発見に努めたいと考えています。

了